

ライマン雑記(17)

副見 恭子¹⁾

ライマンと助手たちⅥ 7人の助手たち(1)

1. 7人の助手たち

昭和24年(1949)4月, アメリカ軍占領下, ライマン先生顕彰記念会が日本工業倶楽部で行われた。その時に, 関係者に配布されたパンフレット「日本鉱業の黎明期と来曼先生」によって, 山内徳三郎・稲垣徹之進・桑田智明・杉浦謙三・賀田貞一・坂市太郎・島田純一・山際永吾・前田精明・西山正吾・三沢思襄・秋山美丸・斎藤武治の13名が主な助手であったことが判明した。書記安達仁造と会計担当前田本方は, 時に応じて測量の手伝をした。彼等を加えると, 15名になる。

まず, 斎藤が, 第三回北海道地質測量調査開始前に, 母の眼病を理由に退学し, 次いで三沢が, ライマン滞日中に死去した。前田本方は, 元々内務

省の役人だったので, ライマンが明治12年(1879)工部省を辞任すると, すぐに古巣に戻った。ライマン離日後, 秋山は, 平河町の地質学社のルールを破って, 仲間から疎外され, グループを離脱したと言われる。第2次ペンシルベニア地質調査で実地経験を積んだ安達が5年ぶりで明治22年(1889)に帰国すると, ライマンの助手10名は, 彼を快く仲間として迎えた。この11名が後々まで語り伝えられるライマンとの絆を堅めた人たちである。

三沢・秋山・山内・賀田・安達・桑田に就いては, すでに「ライマン雑記」で記した。三沢思襄の章を執筆した後, フィラデルフィアにある米国哲学協会で, ライマン資料調査中, 彼が「西洋昔物語・森の中におむれる美女」をローマ字で書いた草案の一部を見つけ, 才人であったのを知ったが, ライマンは, 当初からこの才能に恵まれた病身の青年

明治初期に於ける地質学界の啓蒙者たる遊人 故ライマン先生顕彰記念会

日時 来る四月二十五日 午後一時間

会場 丸の内東京駅前 日本工業倶楽部講堂

一、講 演・當日左の諸氏(イロハ順)の記念講演あり

<p>北光會々長 秋田鑛業専門學校長 工藤博士</p> <p>北海道炭礦汽船株式會社取締役會長 吉田嘉雄氏</p> <p>故ライマン先生舊門下生緣故者 桑田権平氏</p> <p>明治鑛業株式會社前社長 池田謙三氏</p> <p>東京地質學會, 早大講師 小林儀一郎氏</p> <p>日本鑛業會々長, 東大教授 五藤博士 青山秀三郎氏</p> <p>石炭廳長官 工藤博士 佐野秀之助氏</p> <p>日本地質學會々長, 北大教授 理學博士 鈴木 醇氏</p>	<p>三、記念出版 ライマン先生顕彰「近代日本鑛業の黎明期と来曼先生」なる冊子を刊行</p> <p>希望者には當日會場に於て貸費(5円)にて頒布す</p> <p style="text-align: center;">ライマン先生顕彰會 (丸の内銀座西八ノ七日本鑛業會社)</p> <p style="text-align: center;">主催 日本鑛業協會</p> <p style="text-align: center;">社団法人 日本地質學會</p> <p style="text-align: center;">秋田協賛 北光地質學協會</p>
--	--

助 賛 日本鑛業協會 東京地質協會 石炭廳 後 援 商工省 地質學協會

石 炭 廳 後 援 商 工 省 地 質 學 協 會

來 聴 歡 迎 !!

第1図
故ライマン顕彰
記念会のピラ。

1) 元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書:
8 Eaton Court Amherst, MA 01002-2828 U.S.A.

キーワード: ライマン, 島田純一, 西山正吾



第2図 来曼の助手たち(前田精明欠).

に、慈愛の目を注いだ。若くして死んで行った彼を、最後まで見守ったライマンの温情に感銘し、三沢について書くことができた。秋山美丸に関しては、「ライマン雑記(13)」で述べたように、秋山の汚名をそごうと、ライマンが職を賭して、大鳥圭介に書いた嘆願書を発見したのが、執筆の動機となった。

安達、賀田、桑田の3人は、太平洋を渡り、ノースハンプトンのライマン邸に寄居し、ペンシルベニアで地質調査に従事した共通点を有した。滞米中の喜びや苦悩をライマンに書いた手紙が人間的で、ペンが面白いように弾んだ。

それに対して、山内徳三郎は、私書でさえ格式ばった文体であったが、明治7年(1873)のライマン来日から大正の中頃まで約30年にわたる書簡を読

んで、彼のライマンへの敬慕、人となり、純情さに触れ、「ライマン雑記(14)」を記すことができた。

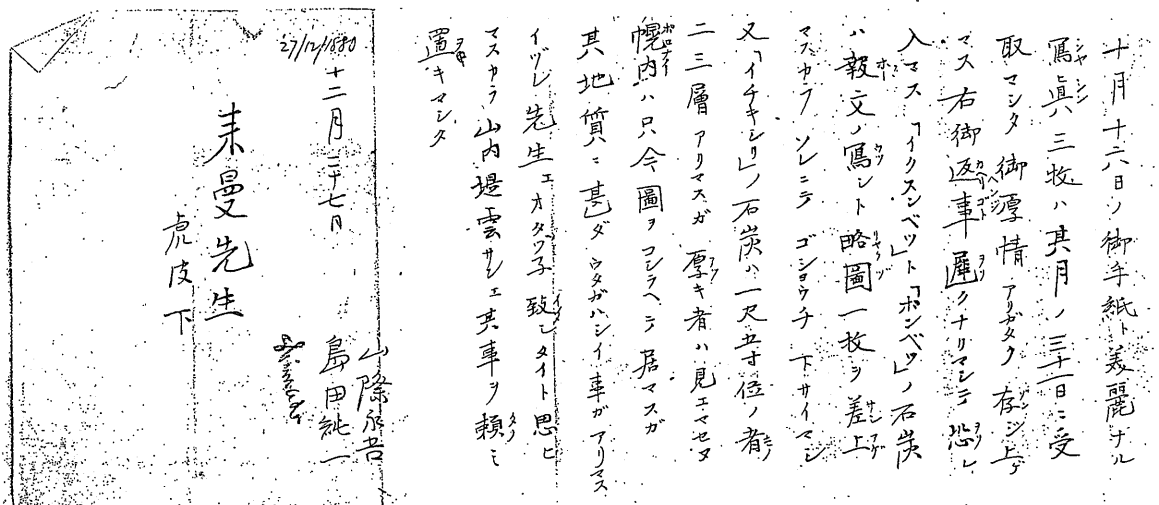
残る7名については、島田純一と西山正吾の資料を除けば、アメリカでは殆ど資料が見つからず、長い間、この章を書くことを回避した。

10年余り、ライマンの資料を探し続ける中に、何時何処で新しい資料が出てくるかも知れない経験をしたので、夢は決して捨てなかったが、筆が遅々として進まなかった。ところが去年の秋、夕張石炭博物館館長青木隆夫氏から数多くの資料をいただき、氏のおかげで「7人の助手たち」の章の展開が活発となった。

2. 島田純一

島田純一は、嘉永5年(1852)周防国に生まれ、稲垣徹之進と西山正吾と同年で、長門国出身の賀田貞一より2歳年少であった。幕末、明治新政府誕生の混乱期では、2歳違っても、思想や行動に大差があったと思うが、島田も賀田も、進取の気性に富み、考え方が柔軟で、行動的な長州人の正確を受け継いでいた。島田は、幕末に洋学校、医学校、兵学校を新設した明倫館で学んだ。この近代的な藩学の教育が、彼のバックボーンを作ったと言っても間違いのないであろう。

明治2年(1869)外務省洋語学所で学び、5年に開拓使仮学校に入学、7年にライマンの第二回北海道地質調査には、西山、前田、山際と共に加わ



第3図 島田純一 山際永吾書簡(フィラデルフィア自然科学院図書館蔵).

った。明治9年からは、ライマンの越後石油調査に従事し、延べ6年間、ライマンの薫陶を受けた。

明治11年(1878)に、助手たちが地質学社を起し、翌年「地学雑誌」第1号を出版した。島田が編集兼印刷長を務めたが、翌13年開拓使の辞令で、山際永吾と共に幌内に送られ、結局雑誌の出版は、明治13年4月31日発行の16号で立ち消えとなり、地質学の研究の道を断たれた。しかし彼らは、半年程で幾春別炭田を発見する。

ライマンは、彼等の幾春別炭田の発見を知らずして、1880年12月22日に離日し、1881年の夏ノースハンプトンで、島田と山際が幌内から出した前年12月27日付の手紙を受け取っている。二人は、「—「イクスンベツ」ト「ポンベツ」、石炭ハ報文、写シト略図一枚ヲ差上マスカラ ソレニテ ゴショウチ下サイマシ」と、短かく謙虚な報告をしているので、果たしてライマンは、日本鉱山史に残る二人の発見を感知したのだろうか。

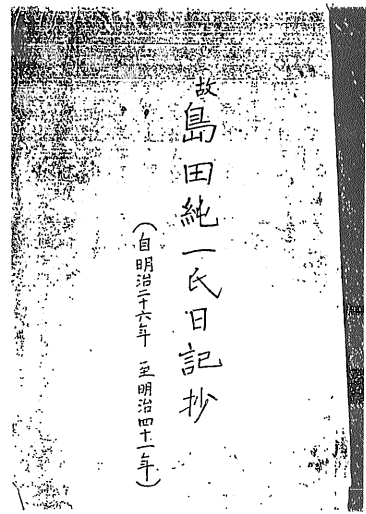
幌内滞在約2年半で、島田と山際は、工部省に呼び戻された。当時、調査、測量、製図が正確にできる日本人は、ライマンの助手以外誰もいなかった。彼らの実力が大いに買われた。

明治15年(1882)12月に島田が帰京した時、右足の凍傷がかなり悪化していた。翌年の4月、膝下を切断し、7月の初め、松葉杖で歩けるようになると、師ライマンに手紙を書いた。一部を引用しよう。

一サテ ワタクシハ サク子ン七月ヨリ ミギノアシヲワヅライ ダンダン ツヨク ナリマシテコノ四月十八日ニ ミギノヒザノ下ヨリ キリマシテ タダイマ ハ キヅグチモ ヨクイエマシタカラ ニホンノツエニテ アルクコトモ ダンダンナレマシタ シカシナガラ コレマデノヨーニ 測量ライタスコトハ モハヤ デキマセン タダヅラヒクコトバカリハ デキマス

つづいて、賀田からライマンに「我々仲間同志で仕事をしていれば、敏腕な島田に事務を担当してもらおうのだが」との手紙が届いた。助手たちの結束が、ライマンとの関係と同じく強靱であったのを知ることができた。

賀田貞一の第2ペンシルベニア地質調査の働きが目覚ましかったので、ライマンは「助手たちや同僚で、誰かアメリカにきたい人はいないか」と、希



第4図 故島田純一氏日記抄(三井鉱山株式会社蔵)。

望者を募った。賀田は、「皆興味はあるけれども、家族があるので決断ができない。島田が行きたいと熱心に希望しているが、足が悪いので無理だろう」と返事を書いている。ライマンは、右足を失っても、ハンディに屈しない島田の積極的な態度を好ましく思った。

島田は、測量を断念して、地図作成の仕事に専心し、2年後、鉱山課長に昇進し、明治17(1884)から明治22年(1889)まで、農商務省鉱山局で活躍した。

明治22年の夏、島田は、助手たちを代表して、ライマンに地質学終了証明書を出して欲しいと依頼状を書いた。鉱山局に大学出が増え、助手たちの時代が衰退した頃である。少し略して、手紙を紹介してみよう。「文は人なり」で、島田の面目がうかがわれる。

一日本ニテ ハ ゼプロマニヨリテ 人ノポジションヲキメルコトニテabilityハドウデモ ヨロシイトイフアリサマデゴザイマス ワタクシドモハ 先生ノオカゲニテ 地質学ヲマナビ コンニチマデコウザンキョクニイマシテ カナリノプラクチスモアリマスカラ ソウニンカン(Higher officer(ママ))ニナルハヅデアリマストコロ 先生ヨリイタダイテイルヂプロマデハ ジウブンデナイトテ ソレガデキマセヌ バカゲタコトデゴザリマス ツイテハワタシドモ 十人ノモノノエイヨ(オノール)ノタメドウヂ地質鉱山学ニオイテジウブンノチシキ(ナウレッジ)

アルコトラ シャウメイ(セルチファイ)シテ クダサ
リマスヨウ 子ガヒアゲマス

能力よりも、免状で地位が決まる不合理を「バカゲタコト」と言い切った合理主義者島田を、当時の役人は、果たして理解したであろうか。後に、近代的なセンスを持ち、実践躬行型の島田を、強引に三井鉱山会社に引き抜いた三井の大立て者、益田孝と団琢磨の先見の明を、さすがと賞賛したい。

明治25年(1892)農商務省に鉱山監督署が設置され、島田は、福岡鉱山監督署技師の辞令を受けた。同年三井鉱山合資会社が設立し、三池炭鉱の近代化が開始されている。明治27年(1894)1月に、伊藤博文内閣の下、榎本武揚が農商務大臣に再任し、6月に山内徳三郎が農商務省にカムバックして、ライマン助手グループが返り咲いた。島田も東京鉱山監督長兼支払命令官に任ぜられた。

帰京した島田を追うようにして、三池炭鉱事務長団琢磨から、彼の後任者になって欲しいという申し出があった。半年の余裕をもらい受諾したが、4ヶ月後、三池の緊急事態で、島田は、急遽三池に赴任することになった。最大の悩みだった勝立坑排水作業がデビーポンプ採用で成功のめどが付き、団が「三池の仕事は終わった」と決断したのが、島田の赴任を早めたと言われる。

彼は、あと3ヶ月余り現職に留まれば恩給をもらえるのを振り切り、炭鉱事務長心得として、11月に家族と共に任地に向った。翌年末三池炭鉱事務長に就任した。

島田純一は、俊才、近代的な考え方の持ち主で、地道にして、実行力があり、全国の鉱山について知見を有し、農商務省鉱山局の事情に通じていた。これらが、団が白羽の矢を彼に放った主な理由であろう。

11年以上前に、三井鉱山株式会社の河田裕之氏にいただいた「故島田純一氏日記抄(自明治二十六年 至明治四十一年)」のコピーの関係事項を追っていくと、彼が益田孝、団琢磨、中上川彦次郎、朝吹英二の三井首脳陣から、絶大な信用を得る過程が、手に取るように判る。例えば、鉱山局長山内徳三郎や渋沢栄一の一行の来山を皮切りに、三池炭田の発展に連れて、伊藤博文、松方正義等の明治政界財界の大物が、三池視察に続々やってくると、巧みに応待して団の期待に応え、三井幹部が



第5図 島田純一と家族(山際永三蔵)。

土地収用や炭鉱買収を企てれば、島田は、下見、調査、報告を行って基礎固めをしている。「職工借入レノ為メ 筑前地方ニ出張 松本 稲垣 安達 諸氏ヲ歴訪依頼ヲ為シ 廿八日ニ帰山 諸氏ヨリハ直ニ應援ノ職工ヲ派遣セリ」(注1)の明治29年(1896)5月26日の項は、ライマンの助手たちの長年の結束を語っていて、大へん興味深い。

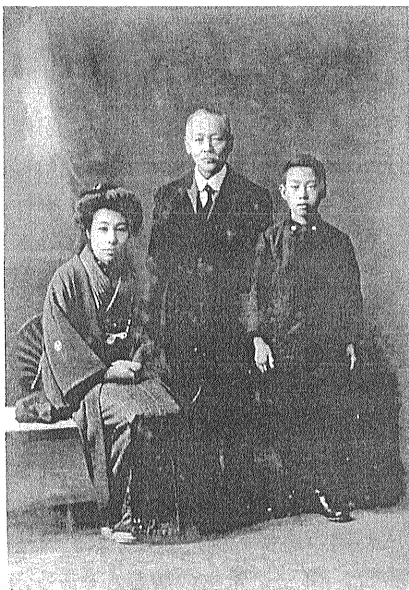
三井が明治33年(1900)3月に田川採炭組を買収し、操業を引き継いだので、13日団琢磨が東京からやってきて田川本坑を巡見した。翌日島田は、肋膜炎と肺炎で倒れ、田川で約1ヶ月療養した。6月三井本店の工務係係長を命じられ、福岡を離れたが、団の頼みで、白水採炭会社に問題が起れば、北の常盤炭田へ、神岡鉱山にトラブルがあれば、西の富山へ行き、豊国炭鉱の件では、福岡に長く滞在したりと、彼の激務は、なおも続いた。

明治41年(1908)、豊国炭鉱の問題が解決すると、12月28日、三井鉱山会社本店調査員に復役した。しかし翌年1月7日会社に出勤し、銀行の一室で滑って右足膝関節を打ち休職し、4月末に団に辞職を申し出た。4ヶ月後ようやく辞職願が受理された。島田は、故郷山口県熊毛郡室積に隠退し、年に2、3回上京するのを楽しんだ。

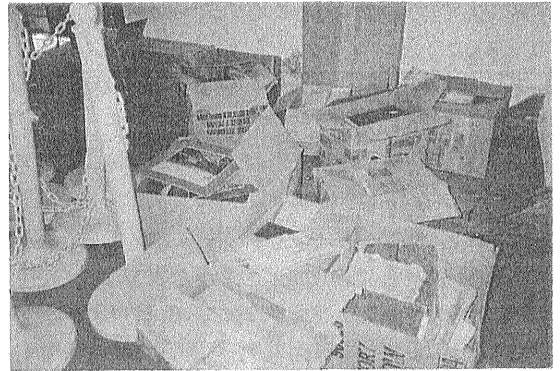
大正15年(1926)発行した「石炭時報」に掲載された懐旧談「ライマン先生」の冒頭で、島田は、「活動舞台から退いて既に二十有余年、往時を回想すると茫として夢の如く、想起するに困難であるが、今も猶忘れ難い追憶の断片として脳裏に往来するのは、多くはライマン先生の事どもである。」(注2)と語っている。三井を辞めて約18年、彼は、七十の坂を越えていた。明治新政府誕生、開拓使仮学

校入学、ライマンの北海道地質測量調査および越後石油調査参加、山際永吾と共に幾春別炭田発見、右足膝下切断、鉱山局に約12年、三井鉱山合名会社に約15年と、明治革命がもたらした社会大変遷の渦中で、彼は、無我夢中で人生を過ごしてきた。半世紀経って、汽車の窓から眺める景色が、後へ後へと去るように、すべて忘却の彼方に消えてしまったのだろうか。しかしライマン先生のことは、鮮やかに心に深くとどめていた。

「君たちは、奴隷ではないのだ」と自由、平等、人権の尊さを説き、自ら実践した師。純真で理想に燃えた助手たちは、師の教えに如何に鼓舞されたことであろうか。そして真の個人主義を示された師。「当時の我々が最も敬服したのは公私の別を先生が非常に明瞭に区別された事で、先生は常に鉛筆を二本所持して、公用と私用とは別の鉛筆を用い、假令（たと）紙に一枚たりとも官物を私用に供するような事は致さなかった」（注3）と回想している。先生との生活を通し、個人の良心と自由を守るため、如何に民主主義に徹することが厳しいかを体験した。最も大切な教えは、学歴や肩書きではなく、個人の實力と至上の人格であるとしたライマンの思想であった。助手たちが肝に銘じて実行したからこそ、縁の下の力持ちに終えた



第7図 西山正吾と家族（マサチューセッツ大学図書館蔵）。



第6図 フォーブスライブラリーに埋もれていたライマンコレクション（筆者撮影）。

彼らの仕事は、明治の日本科学技術の発展に大いに貢献したのだと思う。「故島田純一氏日記抄」を復読している中に、益々この思いが強まるばかりである。

3. 西山正吾

西山正吾が坂市太郎としばしば対比されるのは、ライマンが工務省を辞任した翌明治13年(1880)に、両者共内務省地質課に入り、後に農商務省が新しく設立した地質調査所で、報文の執筆や地図の作成に腕を振ったからであろう。二人とも直接、または間接にエドモンド・ナウマンと働いている。異才な坂は、エピソードに事欠かないが、地味で謙虚な西山については、余り知られていなかった。ところがライマンコレクションによって、彼が秘めたる熱血漢であったことを発見した。

西山は、嘉永5年(1852)9月28日に、千曲川の右岸に位置する上田で生まれた。坂よりも2歳年長である。彼の父が上田藩で土木事業監督をやる傍ら、和歌に親しんでいたせい、仮学校では数学に秀で、在職中に多くの報文を書き、後年「地質学者ライマン先生小伝」や「故山際永吾君小伝」を残した。

明治5年(1872)開拓使仮学校に入学、ライマン第二回北海道地質調査に島田純一、山際永吾、前田精明と共に加わり、後に越後石油調査に従事した。越後石油調査出発の明治9年6月5日のページによると、ライマンが板橋に向う途中、病床にある西山を半時間程見舞っている。その後の資料で、彼のライマンへの敬慕の念が、内務省地質課に入

ってから顕著になっていったことがわかる。

1981年11月、当時北海道開拓記念館学芸部主任関秀志氏とノースハンプトンのフォーブスライブラリーを訪問し、ライマンコレクションを調査した時、高く積まれた段ボール箱の一つから、西山がライマンに書いた手紙を見付けた。その時明治14年(1881)7月15日と12月1日付の后者が、エドモンド・ナウマンの羽後陸中地質調査の年を決定する貴重な役割をするとは全く思わなかった。ナウマンが、1901年ドイツ博物学会で、彼が助手西山正吾および人足、道案内人と共に陸羽山脈を横断した年を1880年だったと述べていることに対して、1881年説もある。手紙その他の資料で、1880年であった証拠を固めてみよう。

先ず、ナウマンが1880年8月以前に日本に戻っていたかどうか、重要な鍵となる。彼がドイツに出発した日が、1879年9月2日であることを、ドイツ人医学者エルウイン・ベルツの日記で確認できる。ナウマンが、世界一周旅行の途、日本に立ち寄ったユリシーズ・グラント将軍と同船した事実も判った。ベルツは、日記で「ナウマンは夢のような幸福に恵まれた、かれは日本地質調査部の長官となり、今回6ヶ月の休職でヨーロッパへ部員を雇うために出かける。」(注4)と信頼すべき情報を提供してくれた。その結果、ナウマンの帰任は、1880年の3月か4月と見てよいであろう。

西山は、何時内務省に入ったのだろうか。ライマンが1877年の夏工部省を辞任した後、大鳥圭介は、一年の間に次々と、助手たちの進路を決めて行った。今津健治著「B.S.ライマンとその弟子たち西山正吾をめぐって」の西山正吾略歴に「1880 E・ナウマンの東北地方の地質調査に随行。」とあるが、月が不明である。しかし、トランシットを背にして撮ったライマンと助手たちの写真が、別離の写真だったのだと推測できる。「明治13年(1880)5月8日平河町先生宅ニテ」の添書きによって、ライマンが離日約7ヶ月前、間もなく助手たちが散り散りに離れていくのを惜しんで撮った写真ではないかと思われる。

西山と坂市太郎に、1881年地質調査シーズンの仕事として、武蔵、信濃、甲斐、伊豆、相模、^{こうづけ}上野地方に於ける調査指令が下り、坂は第三紀層と変成岩、西山は火成岩を受け持った。

西山は、この年の6月末東京を出発し、上野の Matauyeda で仕事を始め、碓氷峠一帯の山岳を調査し、甲州に出て、以後はっきりしないが、11月30日に沼津に到着した。翌日5ヶ月ぶりにライマンに書いた手紙によって、8月にナウマンと^{たごない}田子内から中央山脈を越え、^{おろしえ}下嵐江に出た調査旅行に加わるチャンスがなかったと断定できる。若くして意気込んでいたナウマンが、困難を極めた陸羽地質調査が1880年の夏だったと、21年過ぎても明白に覚えていたのは、当然であろう。

正式に地質調査所が創立する前だったが、同書簡で調査所の人員数が判る。ドイツ人が3人、Nauman 地質, Shut 地形, Corshert 分析と書かれているのは、Naumann(ナウマン), Schutt(シュット), Korschelt(コルシュルト)とみてよいと思う。日本人は、地質4名、分析5名、地形5名、庶務10名、製図5名、書記と門番を入れると、約50名の大世帯だった。

地質調査のみでなく、ライマンが興味を持つ話題を選び、黒田清隆の開拓使官有物私下事件や明治23年(1890)に国会が開設され、憲法が公布される政治面にも触れている。

前述したように、地質調査所開設当初、西山は地質調査ベテランとして重宝がられたにもかかわらず、彼のライマンへの思慕が深まって行ったように思われる。明治15年(1882)ポツツビルで調査に携っていた賀田貞一は「ライマン先生の記念碑を建てたい。就いては、碑に刻む先生の履歴を送ってくれ。」と書いた西山の依頼状を受け取った。賀田は師に「現在は、無理なので、暇ができた時に経歴をお聞きしたい」と西山の趣意を書き送っているが、学位、肩書、勲章嫌いのライマンが記念碑を拒否したことは、想像に難くない。明治39年(1906)フィリピンへの途上、日本に立ち寄ったライマンに、助手たちが叙勲の件を持ち出した時も、「ご好意は真にありがたいが、深く根ざした自分の思想に反するから」と断わり、自立と個人主義の信念に徹した。

1880年12月日本を去る日が近付くと、ライマンは、5年間は処分しないこと、売却する時には彼の承諾を得る条件で、助手たちに、平河町の土地、家、長屋、土蔵を地質学社のため使用するようにと譲り渡した。明治18年(1885)助手たちは、平河町邸

を維持することができず、師の了解を得て手放した。

西山のライマンの名を恒久的に留めようとする努力は尚も続き、翌1886年8月に、地学会(35名)、鉱業会(4百名 工務省大学および東京帝国大学卒業者)と地質学社を合わせて、ライマン研究所を作ることを思いついた。相談された安達は、学社の発展と名誉のために良いアイデアだと賛成したが、学社の資産が3千円-4千円ではと消極的で、自分は貧しく、アメリカにいるので事情がよく判らないので、何ら援助することができないと実際的な見地で意見を述べている。ライマン研究所の計画はすぐ挫折したようである。

ナウマンが去り、やがて西山の仕事が進み、地質調査所や鉱山局でライマンの業績が再認識された。満足した雰囲気、彼は20万分の1地質図幅第1号「伊豆」「吾妻山四近地質報文」「敦賀姫城間地質報文」等を次々と発表した。

突如明治20年(1887)西山は、北海道庁に移り、山内徳三郎の全道地質鉱産調査に加わった。安達仁造がライマンに書いた手紙から、西山の思い出深い蝦夷の大自然と再会した喜びや北海道の驚異的な発展と繁栄を眼前に見た感動が伝ってくる。

しかしすべて束の間の喜びに終わった。翌年神保小虎が全道地質鉱産調査主任となり、山内徳三郎が北海道庁第2部地質課長事務を辞職し、西山は、明治23年(1890)に北海道庁を非職となった。彼は、同年「北海道鉱床調査報文」を書き上げた。

明治25年(1892)農商務省入りし、鉱山監督署に勤務した。鹿児島、福岡、大阪、秋田、札幌と各地を回り、札幌鉱山監督長を最後に、明治32年(1899)三井鉱山会社に入社した。

三井に入ってから、西山は、十分真価を発揮した。樺太、北海道、三池、中国、韓国等内外の地質鉱床を調査し、殊に砂川、芦別、美唄では、三

井北海道炭田の大開発の礎を築いた。西山を団長とした一行が、トランシットを担ぎ、山嶺を越え溪谷を渡り、川辺でテントを張り、わかめや切干し等を食料にして、砂川炭層調査をした様子は、27年前のライマン北海道地質調査旅行を想起させる。

西山が三井鉱山会社技師となって、すっかり落ち着いたころだろうか、明治35年(1902)の夏ライマンは、久しぶりに彼から手紙と立派な挿絵入り本「越後石油事業史」を受け取った。助手たちと越後石油調査をして以来、25年過ぎていたが、よく記憶していた。特に落馬して2週間余り一の沢で休養中、学校を訪れた思い出が鮮やかに残っていたらしい。礼状で、越後の商工業の発達と隆盛、教育の進歩を“極めて満足である”と喜びを表した。

以後ライマンと西山の文通が続いたが、大正9年(1920)初秋ライマンの悲報に接した。彼は「昊天何ぞ無情ニ此偉人ヲ奪ヒ去ル。」と師の死去を深く哀惜した。

一介の地質技師として、約21年間地質調査に精魂を傾けた西山は、大正9年(1920)に退職し、昭和5年79才で高潔な生涯を終えた。「調査ハ極メテ精確妥当ニシテ、後人感歎措ク能ハザルモノアリ」と称えられた彼の實力と、温厚篤実そのものの如しと称えられた彼の人格は、ライマンの思想と相通ずるのではなからうか。

引用文献

- 注1 故島田純一氏日記抄(自明治二十六年 至明治四十一年 手書き コピー p.10).
 注2 島田純一(1926):ライマン先生-弟子の観た先生, 石炭時報 Vo.1 no.3, p.270.
 注3 島田純一(1926):ライマン先生-弟子の観た先生, 石炭時報 Vo.1 no.3, p.271-272.
 注4 エルウィン・ベルツ(1988):ベルツの日記(上), トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳, 岩波書店, p.91.

FUKUMI Yasuko (1999): A note on Lyman (17)-Lyman and his assistants VI.

< 受付: 1999年5月1日 >